

【曲目解説】

メンデルスゾーン（1809・2・3～1847・11・4）作曲の「美しいメルジーネの物語」は、「序曲」となっていますが、特定の歌劇や組曲の冒頭として作られたものではありません。これは、アンサンブル・ディマンシュの前回演奏会で採り上げた「フィンガルの洞窟」等と同様で、標題音楽的要素を持ち、後に「交響詩」として発展していく管弦楽作品です。メンデルスゾーンは、このような作品を数曲作っていますが、いずれも風景、情景、色彩、雰囲気、心情描写に優れた佳品と言えます。「管弦楽のための幻想曲」といった趣もあります。本日演奏する「美しいメルジーネの物語」は、1833年に初演された、ドイツの作曲家、コンラディン・クロイツァーの歌劇「人魚姫と騎士」に触発されて作られました。この物語は、人間の姿となった人魚、メルジーネが騎士と恋に落ち、結婚します。その時に、メルジーネは騎士に、「私が自分の部屋に入ったら、中を覗かないでね」と強く頼みますが、騎士はついその扉を開けてしまいます。そこには、人魚の姿のメルジーネがいたのです。自分が人魚であることを見られたメルジーネは騎士の前から姿を消し、二度と現れなかった、というものです。日本の「鶴の恩返し」と似たパターンです。メンデルスゾーンは、この歌劇を観た後、作曲に掛かり、その年の内に完成、翌1834年にロンドンで初演、1835年に改訂し決定稿としています。曲は、二人の恋愛を描くような柔らかく、明るい部分と暗く悲劇的な様相の激しい部分が交錯し、最後は姿を消すメルジーネを暗示するように、静かに締め括られます。

ウォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756・1・27～1791・12・5）の「天才」に関しては、その逸話に事欠きませんが、本日演奏する「リンツ交響曲」にも驚かされます。モーツァルトは、1783年10月、任地のザルツブルクからウィーンへ帰る途中、妻のコンスタンツェとともにリンツに滞在します。そこで大変な歓迎を受けますが、その地から父親宛てに送った10月31日付けの手紙には、次のような記述があります。「11月4日火曜日に、ここリンツで音楽会を開きますが、今1曲の交響曲（のパート譜）も手許に持ち合わせていないので、新しい交響曲を大急ぎで書いています。」この「新しい交響曲」が「リンツ交響曲」ですが、写譜屋がパート譜を作る時間を考えると、せいぜい1日か2日で完成させたこととなります。いやはや。天才の証をお楽しみ下さいませ。

アレクサンドル・ポリフィーエヴィチ・ボロディン（1833・11・12～1887・2・27）は、ロシアのサンクトペテルブルクに生まれた、ロシア国民楽派の作曲家、ムソルグスキーやリムスキー＝コルサコフ等とともに「ロシア5人組」の一人として知られていますが、本職は化学者・医師です。作曲は多忙な本業の合間に行っていたため「日曜作曲家」と称されることもあります。作品の数は少ないですが、どの作品も片手間に作られたとは思えない美しい旋律に満ちています。一方化学の世界では、彼の名を冠した「ボロディン反応」や彼自身が発見した「アルドール反応」（二つともどのようなものなのでしょうか…）というのもあるようで、化学者としても名を馳せています。彼は、交響曲を3曲（第3番は未完）書いていますが、この第1番は、1862年から1867年にかけて作られました。29歳の時、ボロディンの才能を認めたバラキレフから、交響曲を書くように勧められて書いたのがこの作品です。彼の作曲家として本格的な出発点となったこの交響曲の初演は、1869年、バラキレフの指揮で行われました。ちなみにこの時期の交響曲としては、ドヴォルザークの第1、第2、チャイコフスキーの第1番などがあります。この曲は随所にシューマンの影響が散見されますが、特に第4楽章では、付点音符が特徴の、いわゆる「シューマン・リズム」がちりばめられていて、シューマンの第4交響曲終楽章等を連想させます。ボロディンは24歳の時、ムソルグスキーと出会いますが、その時に紹介されたシューマンの曲に興味をひかれ、その後のイタリア、スイスへの旅行で、シューマンの影響を大きく受けたと言われています。